

2022年5月22日 主日礼拝

説教題 『 』 付きの真実』 第一テモテ 2章 8節～3章 1節 a

主任牧師 加藤 誠

「婦人は、静かに、全く従順に学ぶべきです。婦人が教えたり、男の上に立ったりするのを、わたしは許しません」(第一テモテ2章 11-12節)、「この言葉は真実です」(3章1節 a)

先週の定期総会で、今年度の宣教主題が「再構築（リコンストラクション～希望は欺かない～）」に決まりました。約 70 年の長きにわたって大井教会の礼拝を支え、活動を支えてきた礼拝堂が解体され、まったくの更地になって、そこに新しい礼拝堂が建てられた。それと同じように、私たちが今、御言葉により新たに「再構築」されていきたいという動機が、原案を考えた執行委員会では語られていたわけですが、総会の中では「再構築」というテーマの内実について、みんなで深く掘り下げて協議する時間がなかったのは残念でした。「再構築」という、聖書的にもラディカルな問いをもつ主題が、ただの飾りの言葉に終わることがないように、一人ひとりが考え、深めていく機会となることを願い、今日からペンテコステまでの三回の礼拝で 6 人の証し者が立てられていることをうれしく思います。それぞれの証し者が今、聖書から何を聞いて、これからの教会に何を期待するのか。その問いかけを受けて一人ひとりが考え始め、聖書の御言葉により、また聖霊により建て直されていくことを願うものですが、併せて礼拝の説教においても「再構築」というテーマを意識して、何回かに分けて聖書から聴いていきたいと考えています。

さて、私たちの信仰の根拠である『聖書』を読むときに、「これってほんとなの？」「この通りにしないといけないの？」と、疑問を抱かざるを得ない箇所に出会うことがあります。今朝ご一緒に開いたテモテへの手紙 2 章の言葉のその一つです。使徒パウロが愛する弟子テモテに書き送った手紙の一部ですが、パウロはここで「婦人は、静かに、全く従順に学ぶべきです。婦人が教えたり、男の上に立ったりするのを、わたしは許しません」(第一テモテ 2 章 11-12 節)、「この言葉は真実です」(3 章 1 節 a) と非常に強い口調で教え諭しています。パウロは自分の教えの根拠として創世記の「人の創造物語」をあげています。アダムが最初に造られ、その後エバが造られた。しかもアダムは騙されなかったが、エバは騙されて罪を犯した。しかし婦人は清さを保ち、貞淑であり、子を産むことで救われるというのです。

『聖書』に書かれている言葉に疑問を持つべきではない。神の言葉としてそのまま受け入れるべき」という読み方もあれば、「疑問を持つ箇所と出会ったら、聖書全体を読み直して、自分で考え続けることが大切だ」という読み方もあるのですが、皆さんはどのように、今朝の『聖書』を読まれるでしょうか。

まず実際に創世記の人の創造物語を読み直してみることが必要でしょう。ほんとうにパウロの言う通りのことが書かれているのでしょうか。今から紹介する読み方は、東京バプテスト神学校の授業で山口里子さんから学んだことが下敷きになっているのですが、創世記を実際に読み直してみると「男が女よりも先に造られた」のでは

ないことにまず気づかされます。2章で最初に造られた存在は「土」(アダマ)から造られた「人」(アダム)と呼ばれていて、この時点ではまだ男女の性は決定していません。「人」(アダム)と呼ばれる「土くれ」が一緒に生きるパートナーが与えられた時に初めて「男」と「女」という言葉が使われ始めています。また3章では「女だけがだまされた」のではなく「男もだまされています」し、男の方が神に責任転嫁していて女よりも「ずっと質が悪い」のです。「先に造られた男がえらい」と言いますが、創世記1章の創造物語は最後に造られた人間をもって「創造が完成した」と語られ、2章でも「女の創造をもって人の創造が完成した」とも読めるわけで、「早い者がえらい!」とは別の考えが示されています。むしろ「人は独りでは生きられない」、「ふさわしい助け」が必要だというときの「ふさわしい助け」は原語的には「向かい合って一緒に荷物を運ぶ、なくてはならないパートナー(同伴者)」という、根源的な「助け」が示されています。単なる「ふさわしい助け」とは「都合の良いヘルパーさん」ではないのです。また「女は子を産むことで救われる」との主張は主イエスの教え(ルカ11・27~28)を完全に否定するものです。主イエスは「子どもを宿すこと以上に、神の言葉を聞いて従うことこそが幸いだ!」と語られてたからです。

パウロは「これは真実な言葉です」と大上段に語っていますが、それは「 」付きのパウロにとっての真実であって、すべての人が「こう理解しなければならない真実」ではないはずです。パウロがここでこう書いていると「創世記はこう理解しないとならないのだ」という気持ちになるわけですが、そうではなく一人ひとりが真実を求めて聖霊の導きを祈りつつ、聖書全体をしっかりと読み直していく。そして主イエスが教会の私たちに手渡してくださった大切な福音の中身はいったいどういうものなのだろうと、私たちが考え続けていくことが大切なのではないのでしょうか。

人間には生まれながらに「男と女」という二つに明確に分類されるものではなく、多様な性自認、そして性愛の傾向をもっていることが、最近になってようやく語られるようになってきました。わたし自身、長い間「男と女」の分類が当たり前で、「恋愛は男女間のもの」という考えに支配されてきたのですが、実際に何人かの方の話を直接に伺う機会があり、その方がほんとうに苦悩し、痛みながら生きてこられた物語を教えていただく中で、「これは私たちがきちんと学んでいかなければならない課題なのだ」と示されてきました。そして、その方々が教会で、キリスト教信仰の名のもとに存在を否定され、心ない言葉や態度で深く傷つけられてきた経験を伺ったときに、間違ってもこのテモテの手紙のように「聖書にはこう書いてある!これが真実だ!」と、人を断罪するようなことがあってはならない。長いキリスト教の歴史の中で、教会が聖書を根拠に大きな間違いを犯し、おびたしい人々の命を死に追いやってきたことをしっかりと見つめ、悔い改めていかなければならない。そして、この大井教会では、どのような性自認を持つ人であっても、神さまから愛されている大切なひとりとしてお互いに受け入れ合っていく、そういう信仰をしっかりと聖書からいただいきたいと今、深く示されています。さて皆さんはどのようにこの箇所を読まれますか?

